

『増鏡』と隠岐

福田景道

一 「増鏡」における「地方」と「中央」

『増鏡』の歴史叙述の中心には天皇家がある。皇位継承の過程は構想上の主軸になって全編を貫流し^①、宮廷貴族諸門流の浮沈も看過されない^②。また、同時に、武家と公家の対立・抗争にも相応の紙幅が与えられ、それに伴って武家社会に視点が据えられる場合も散見するのである。

特に、第二「新島守」の巻前半は、「たけき武士の起こり^③」を説くことに起筆され、源平両氏の興廃や鎌倉武家政権の内情が精叙されるなど、公家社会の中心から遠く隔たる東国に視点を限定する。平氏の末裔「平四郎時政」が居住した「伊豆の国北条の郡」、源氏の嫡流「兵衛佐頼朝」の流刑地となった同じ国の「蛭が島」が明記される。覇権を手にした頼朝が拠点としたのが「相模の国鎌倉の里」であることも知らされ、「遠江の国橋本」「勿来の関」「修善寺」などの東国地名が紙上に点在する。また、この巻の承久の乱までの部分では鎌倉が「増鏡」世界の主要な舞台となる。第一巻「おどろの

した」に活写される公家勢力と「新島守」前半の主役である武家勢力とは、承久の乱で接触するまではそれぞれが独立した世界を構成しながら併存しているとも理解でき、鎌倉がもう一つの「中央」となったこの時代の実情の反映とも見なせるであろう。この意味で「新島守」はもう一つの冒頭と言えるかもしれない。

しかし、そうはいつても、『増鏡』全編を通じての武家や東国の占める割合は公家や京都のそれに比べてあまりにも小さい。「新島守」の鎌倉・東国にしても、京・都と対等に対立するものとはなっていない面もある。たとえば、頼朝は武家の棟梁とは位置付けられず、「君の後身」「世のかため」として京都政権に従属する存在と見なされている。鎌倉での武家政権整備の業績よりも二度の上京が強調され、征夷大將軍の地位よりも権大納言・右近衛大將任官が特記されて、左衛門督と呼ばれる長子頼家とともに公家社会の秩序の中に明らかに組み込まれる。橋本や勿来は著名な歌枕であり、和歌によって王朝的に彩色される「地方」にほかならない。『増鏡』にあるのは、あくまで都の周縁としての東国なのである。

[369]

「君に二心われあらばやは」の詠歌とともに三代將軍実朝が登場

(同、三九四頁)

すると、鎌倉の京都への従属関係はさらに顕著になる。実朝任右大臣の大饗に関する記事では、京から勧請された鶴岡八幡宮において、「京より尊者をはじめ上達部・殿上人多く」列席する中で行われたことが大きな意味をもたされる。実朝暗殺の悲劇は「都」と「鎌倉」が融合したこの場で起こったのである。この暗殺事件に起因して誕生した摂家將軍は鎌倉の「都」化をさらに促進する。「増鏡」中の將軍頼経は、九条道家の息男の一人として、また西園寺公経の外孫として彼らの権勢の基盤になり、栄華実現の一翼を担う存在である。ここにいたって『増鏡』における將軍の地位は大臣・公卿などと異ならなくなり、公家社会の秩序に吸収されたと言つてよいであろう。続いて親王將軍の出現を見ると、將軍の地位は一貫して天皇位に進ずるものとして扱われる。「まことに大やけになり給はずば、これ(將軍)よりまさる事、なに事かあらん」(三〇八頁)、「御位などのかはる気色に異ならず」(三九三頁)、「たゞ受禪の心ちぞする」(三九四頁)などと、將軍交代に際して皇位との等質化の表明が繰り返される。このようにして將軍位が公家社会の一角を占めるようになるのに伴つて、將軍が在任する鎌倉も京都と同質の地に変じるのである。上達部・殿上人の鎌倉常住が示されるだけでなく、

(將軍惟康親王は)此ごろ權中納言にて、右大将かね給へれば、御隨身ども、花を折らせてさうぞきあへるさま、宮こめきておもしろし。

(第十一「さしぐし」三九二頁)

(將軍下向を武士が迎えるさまは)宮こにたとへば、行幸にしかるべき大臣などの仕まつり給へるによそへぬべし。

などと鎌倉の「都」化が図られ、「関の東を宮この外とて、をとしむべくもあらざりけり」(三九四頁)という揚言までもが添えられる。このような鎌倉を京都と質的に対立する世界と見なすことはできない。また、將軍に対しては執権が「後身」であり、執権に対しては内管領が「後身」と称されるような、主君には常に補佐する「後身」が存在するという鎌倉政権の基本的な構図が見いだされるが、これは『増鏡』の捉える「都」の政治機構における基本的構図の投影にほかならない。すなわち『増鏡』の鎌倉・東国は小「都」の一面が顕著で、「地方」として「中央」の対極には位置付けられていないのである。足柄・箱根山などを境界に国土を東西に分断する例などもあるが、必ずしも異質な世界と見なされているわけではない。

また、『増鏡』には水無瀬殿、鳥羽殿、宇治、吹田、熊野、高野などの都周辺への御幸の有様がしばしば詳述されるが、そこにも都と本質的に異質な世界は展開していない。洛外への御幸はそこで「都」的文化生活を営むことにほかならず、一種の「都」拡張運動とも考えられる。したがって、この場合も「都」に等質化される鎌倉と同様で、「地方」としての性格は見いだせない。

このように『増鏡』には基本的に「都」的世界のみが追求されるが、その中であつて、流刑地だけは「都」とは明確に区別されているように思われる。本来、流罪の目的は「都」(中央)からの追放であり、その目的のためには流刑地は反「都」的世界でなければならぬ。その地が遠隔の離島であれば「都」との質的隔離も著しい

であろう。

実際、数多くの辺境の国々が流刑地に選ばれ、『増鏡』にも数例が記載されている。ところが、『増鏡』ではその中でも隠岐国に関する記事のみが際立って多く、隠岐以外の流刑国はほとんど無視されているといっても過言ではない。承久の乱では、後鳥羽院の隠岐以外に、順徳院の佐渡、土御門院の阿波、六条宮雅成親王の但馬、冷泉宮頼仁親王の備前などが配流の地となったが、後鳥羽院の隠岐での有様が入念に活写されるのに対して、他の流謫生活はまったくと言ってよいほど描かれていない。『六代勝事記』や『承久記』には、順徳院遠流の経緯も詳しく、雅成・頼仁の流刑も明記されるのに、『増鏡』には順徳院の配流生活はほとんどなく、雅成らは痕跡さえとどめない。⁸⁾『承久記』などに詳しい後鳥羽院近臣の遠国での処刑も『増鏡』にはまったく記されない。⁹⁾一方、元弘の乱に関しては、後醍醐帝・尊良親王に加えて、花山院師賢他七名の近臣の配流や処刑の事情が刻記されている。¹⁰⁾しかしながら、流刑地での苦難が明らかにされるのは後醍醐先帝のみであり、しかもその描写は詳細を極める。つまり、流謫生活の描出を後鳥羽院と後醍醐帝に限定するのが『増鏡』の特色なのである。隠岐において両帝王はさかんに都での出来事を懐古し、都と隠岐島とを頻繁に比較して涙するが、これによって隠岐が反「都」的世界であることが確認される。隠岐配流は「都の外に移し奉る」(二七五頁)ためであるし、その地は「人離れ里遠き島」(二七九頁)と認識されている。したがって、『増鏡』の隠岐は、具体性をもって描かれるほとんど唯一の流刑地であり、「中央」に対する「地方」、「都」に対する「鄙」の性格が

例外的に明確に付与されていると思われる。

ところで、『増鏡』からうかがえる隠岐島の有様は、詳述はされるが、正確さと実在感に欠ける面がある。実際に現地に渡航していても十分に想像で補える範囲の描写しかなく、両度の隠岐流謫生活を実見した者の筆録を想定しなければならぬ箇所は皆無と言つてよいほどである。¹¹⁾これは一連の蒙古襲来の記事の叙述方法に類似するが、隠岐に関する記述の方がはるかに詳細であり、関心の高さにおいて隠岐は蒙古に対しても特異である。したがって、この作品は流刑地としての隠岐の歴史的考察に適さない反面、「中央」(都)にとつての「隠岐」(あるいは「地方」)の心象や機能は十分に察知させるものと思われる。そこで、『増鏡』世界形成に「隠岐」がどのように貢献しているかが注目される。

二 後鳥羽院と後醍醐帝の近似性

多様な階層の多数の人物が多年にわたって隠岐での流謫生活を送つた。¹²⁾その中で、尊貴さにおいて特立するのが後鳥羽院と後醍醐帝である。両者は、また、鎌倉の武家政権の倒滅を企図して果たし得ず、その結果、治天の君という至高の地位から一転して隠岐流人の境涯に身をおとすという独特の体験をも共有する。それらの経緯は諸書に多彩に記載されているが、特に『六代勝事記』『承久記』『増鏡』『太平記』『神皇正統記』『梅松論』などの歴史文学作品の好個の素材となつて人口に膾炙している。

ただし、各作品の対象とされる期間(時代)からみて、二貴顕の

[367]

悲劇的生をともし一作品内に取り上げ得るのは『増鏡』と『神皇正統記』だけであり、両度の隠岐流謫の実情をともし内包する作品は『増鏡』に限られる。『六代勝事記』や『承久記』の成立時には後醍醐帝は未だ存在せず、『太平記』の世界に後鳥羽院が登場する余地はない。『梅松論』には後醍醐帝の配流の有様がある程度記されるが、後鳥羽院のそれはない。また、『神皇正統記』には配所での生活はまったく叙述されていない。したがって、『増鏡』は二帝王の隠岐での体験を対比的に形象化する唯一の文学作品として注目に値する。史上二回しかない治天の君の隠岐流人生活がともに『増鏡』一書の中に包含されたのである。

ところが、『増鏡』においては、両度の至尊の流謫は単に作品に内包されるにとどまらず、作品の機構を大きく左右するものになっている。別稿で論及したように、編年の歴史叙述の起点となる後鳥羽院が同時に観念的な「始原」として全編を制御し、それに対応して中心的存在の後醍醐帝が最末尾から作品全体を統制することによって『増鏡』の統一性は保たれている。形式的な首尾と実質的な首尾とが後鳥羽院と後醍醐帝の存在によって一致するところに作品世界統一の根因が見いだせる。『増鏡』には、後鳥羽院と後醍醐帝の類似体験を首尾に配置する構想が底流しているのである。

それに応じて、後鳥羽院と後醍醐帝の人格・属性までもが類似させられている。後醍醐帝は後鳥羽院と同様に和歌の道にすぐれた帝王として造型され、『統千載集』撰進が事実にして後醍醐帝の功績に加えられるのもその目的のためと思われる。一方在位中に和歌を詠んだ明証のない後鳥羽帝の治世が和歌で彩られる仮構は、在位

の天皇として和歌に親しんだ後醍醐帝に類同させる効果を伴う。『増鏡』にあつては、両者は和歌の道に秀でたすぐれた為政者としての共通性を堅持していると言える。

また、後醍醐帝と一体化することによって、後鳥羽院に対する評価が強く規制されるのではないかとも思われる。承久の大敗に主眼を置く『六代勝事記』では後鳥羽院は「悪王」にもたとえられるなど酷評され、『承久記』『神皇正統記』などでも一様に政治行動が非難されるのであるが、『増鏡』では一転して理想的な為政者と見なされて、同情的に描かれる。おそらく、一時的にとはいえ公家の天下統一統を果たした後醍醐帝が一応肯定的に捉えられるのに伴って、同様に造型された後鳥羽院の評価も肯定に転じたのであろう。

『増鏡』には承久の後鳥羽院と元弘の後醍醐帝を同一化する構想がたしかにある。これをもって、後醍醐帝あるいは大覚寺統が政治的に擁護されているとは判断できないが、首尾の二帝王が照応することが『増鏡』の性格を大きく規定することは間違いない。ただし、二帝王の照応は作品世界の基層を伏流するにとどまって、表層に顕在化する場合はそれほど多くない。照応が直接表現される例はほとんどない。そこで注目されるのは、その多くない例の大部分が一連の隠岐配流記事の中に見いだせる点である。隠岐流謫において後鳥羽院と後醍醐帝の共通性ははじめて表面化するのである。

まず、隠岐へ護送される途次の各所で、後醍醐帝の境遇は後鳥羽院に重ね合わされる。

ふりにし事を思し出づるにも、たち返また世をやすく思さん事のいとかたければ、よろづ今をとぢめにこそと、思しめぐらす

に、人やりならず、口惜しき契り加はりける前の世のみぞ、つ
きせずらめしき。 (第十六「久米のさら山」四五八頁)

三日月の中山にて、むかし後鳥羽院の仰られけん事思し出づ
るさへ、げに憂かりけるためしなり。

伝へ聞く昔がたりぞうかりけるその名ふりぬる三日月の松
(同、四六四頁)

このように、後鳥羽院配流の「ふりにし事」に想到し、同じ行路
を辿った院の故事を反芻して、先帝後醍醐は自己の運命を後鳥羽院
のそれに重ね合わせるのである。「後鳥羽院の隠岐に移らせ給けむ
時なども、さこそありけめ……」(四五九頁)という語り手の言辭
もある。第三「藤衣」末尾(二九一頁)に死去したことが記されて
からほとんど文面に現れなかつた後鳥羽院が、後醍醐帝の隠岐への
道行に際して突如として注目を集め、後醍醐帝との類似性が確認さ
れることになる。「梅松論」などで両者の相違が強調されると対
比すると、「増鏡」の独自性がさらに明らかになるであろう。²⁰⁾

また、後醍醐帝は隠岐に着いてからも

御身の上はさしをかれて、まづかのいにしへの事思し出づ。かゝ
る所に世をつくし給けん御心のうち、いかばかりなりけんとな、
あはれにかたじけなく思さるゝにも、今はた、さらにかくさす
らへぬるも、何により思ひ立ちし事ぞ、かの御心の末や果たし
遂ぐると思ひしゆへ也。苔の下にもあはれと思さるらんかしと、
かき集めつきせずなん。(第十六「久米のさら山」四六五頁)

と後鳥羽院の無念に思いをはせ、自身の倒幕計画は院の遺志を受け
継ぐものであったことを告白する。意外なことに、ここに至るまで

の記事においては、後醍醐帝の挙兵は後鳥羽院のそれとは関係付け
られていなかったのである。たとえば、正中の変の原因は、大覚寺
統を正統と決する後嵯峨院の遺言を鎌倉政権が結果的に無視した点
に求められている(第十四「春の別れ」)。後鳥羽院の残した宿願を
後醍醐帝が達成したという構図は、隠岐流謫を体験してはじめて顕
現するものと考えなければならぬ。

『増鏡』においては、後鳥羽院と後醍醐帝は倒幕の軍事行動や和
歌への傾倒によって同一化されるよりも、隠岐という「地方」を介
してはるかに堅固に結び付くのである。

三 異郷(異界)としての隠岐

後鳥羽院と後醍醐帝はこの上ない尊貴性をもちながら、鄙の地を
漂泊した。この点を強調する『増鏡』世界の根底には、すでに指摘
されるように貴種流離譚の話型を見いだすことも可能であろう。²¹⁾

『増鏡』の流離が貴種流離譚とかかわるとするならば、流離の苦難
を経験した後の後鳥羽院と後醍醐帝の運命の対照が注目される。神
または貴人が罪の犯しによって地方に流離して辛苦するという条件
は『増鏡』の両者に等しく合致するのに対して、その次の段階には
顕著な差異が生じてくる。すなわち、辛苦の果てに「はかない生を
終えるもの」と「幸福に転じて都に帰るもの」にこの話型の結末が
大きく分岐すると言われるが、²²⁾後鳥羽院が前者に後醍醐帝が後者に
照合するとみて間違いない。そうすると、両帝王は同一化される一
方で厳しく分別される必要が生じる。『増鏡』の構想の中で同一人

〔365〕

格と言ってよいほど類型化される両者の運命の帰結は相反することになるのである。これは後醍醐帝帰京の際の次の一節に象徴される。

（帰還の行列を見るための）車などうち続きたるさま、ありし御くだりにはこよなくまされり。物見ける人の中に、

むかしだに沈むうらみを隠岐の海に波たち返今ぞかしこき昔のことなど思ひあはするにやありけん。

（第十七「月草の花」四八六頁）

「昔」の後鳥羽院と「今」の後醍醐帝は帰京の成否によって峻別されている。しかし、両者がここに對比されるのは両者の運命に類似するところがある点に基づくに違いない。後醍醐帝は後鳥羽院と途中まで同一の運命を辿りながら、貴種流離譚の結末に相当する段階において背反しなければならぬのである。たとえ建武新政権が短期間で瓦解した事実があっても現行『増鏡』の結尾は後醍醐帝の壮挙であることは否定できない。それゆえ隠岐で朽ち果てた後鳥羽院ととにかく都に帰還した後醍醐帝の相違は軽視できないであろう。さて、貴種流離譚の話型に照らして『増鏡』における二帝王を對比すると、後醍醐帝に関する記事に貴種流離譚の要素が多出するのに対して、後鳥羽院に関しては離島生活の悲傷が繰述されるのが目立つだけで流離譚の潜在をうかがわせる徴証が乏しいことが注目される。これは後醍醐帝に与えられた紙幅が相対的に多い点にもよるであろうが、それだけでなく、流離譚に必要な要素の多くが後鳥羽院に欠けているからでもある。

たとえば、後鳥羽院の場合は都から隠岐に遷る過程が完全に脱落している。「隠岐の国におはしますべければ、先鳥羽殿へ、網代車

のあやしげなるにて、七月六日入らせ給」（二七五頁）と旅立ちが告げられる箇所次に院の所在地点が記されるのは、「このおはします所は、人離れぬ遠き島の中なり」（二七九頁）しかなく、鳥羽殿と隠岐島との経路に関する記述を欠く。原資料の不足・不備という事情もあるが、意図的に配流の道程が書かれなかった可能性もある。「六代勝事記」や『吾妻鏡』において母七条院に宛てた「たちね……」の歌が隠岐への道中で詠まれたとされるのに対して、『増鏡』では隠岐での詠歌として位置付けられている。これを『増鏡』作者の作為によるものとすれば、『増鏡』から意図的に道中記事が省略されたことになる。いずれにしても、隠岐までの護送過程に詳しい後醍醐帝とまったく異なる後鳥羽院との対照は際立っている。

後鳥羽院に欠ける都から隠岐までの旅程において、後醍醐帝の物語は貴種流離譚と結び付く。まず出てくる地名のほとんどが著名な歌枕であることから、道行的視覚に基づく貴種流離譚が形成されていると言われる。道行は貴種流離譚の一要素になる。旅の途次に帝の境遇が在原行平・光源氏などの流離体験に重ね合わされるのも顕著な特色である。

また、これに相関して、後醍醐帝の目指す隠岐の地が「異界」であることが明確化されていると考えられる。幾多の山・川を越えることがすなわち境界を越えて異界に入ること²⁸に等しい。「逢坂」という関所名を越えることも記される（四六四頁）。前掲の「三日月の中山」は美作と伯耆との国境の峠を意味するだけでなく、都と異界との境界でもあったとも考えられる²⁹。こうして隠岐の性格は異界

〔異郷〕に近づく。『増鏡』における隠岐が「都」に対する「鄙」、
「中央」に対する「地方」と設定されていることは既述したところ
であるが、後醍醐帝にとつての隠岐の反「都」的性格は道中におい
て境界が越えられることで一層明らかになる。また、後鳥羽院との
差異もこの点で一層顕著になる。

かつては「彼国地在²西極界²、近²新羅²」と記されて異国との境
界と見られた隠岐は、『増鏡』の後醍醐帝の配流の経緯によつて異
界（異郷）に転じるのである。

四 再生の場としての隠岐

境界を越える道行を経験しない『増鏡』の後鳥羽院にとつての隠
岐は、「異郷」としての定位が不完全であつた。「異郷」が苦難とと
もに再起する呪力をも与え得る地であるとすれば、院の流離は、異
郷体験と直接結び付かないことに基づいて、再起の可能性の制限さ
れたものにならざるを得ない。事実、後述するように、後醍醐帝に
とつての隠岐が再起（再生）の場として有効に機能するのに対して、
後鳥羽院に再生力が与えられる徴証は見いだせないのである。

また、隠岐において「はかない生を終える」後鳥羽院と、「都に
帰る」後醍醐帝との運命の対照は、隠岐でのあり方の相違に起因す
るように思われる。二度の配流の『増鏡』における位置付けが異な
るだけでなく、両帝王が隠岐にどのように対処したかの相違がその
後の明暗の分岐点になるように思われる。以下にそれを例証する。

『増鏡』の和歌は後醍醐帝によつて最も多く詠まれ、後鳥羽院が

それに次いで、他を圧する²⁹。これは和歌にすぐれる名君という共通
性が両者に与えられることに直結するが、その分布を配流による運
命の変転と関係させると、注目すべき差異が見いだせる。すなわち
実際の後鳥羽院の和歌は大部分が都で詠まれたにもかかわらず、
『増鏡』では二〇首中一六首までが隠岐島でのものである³⁰。しかも
前述のように「たらちね……」の歌は道行から島へ移された可能性
があつた。一方、後醍醐帝の歌は二八首と多いが、そのうち二〇首
までが元弘の戦鬪での流浪から隠岐への道行にいたる悲嘆を詠むも
のである。ところが、隠岐に着いてからの記事中には一首しか見ら
れない。後鳥羽院の道行そのものが欠如することの当然の帰結とも
言えるが、大部分の歌が隠岐で詠まれる後鳥羽院と、隠岐に至る道
行に詠歌が集中する後醍醐帝との差異は鮮やかである。

この和歌の分布の偏りは、ちょうど正反対の方向に偏る「行なひ」
（勤行）の用例の検討によつて意味するところが明らかになる。承
久の乱の勝利を祈願して「御修法ども数知らず行なはる」（二七四
頁）と記される後鳥羽院であるが、敗北して隠岐に流されてからは
悲嘆を和歌に詠み込むだけで「行なひ」からは遠ざかる。再起の意
欲を放棄したとしか思われない。わずかに「阿弥陀仏の御つとめ」
（二九一頁）が見られるが、これは直後に訪れる死を前提にしたも
のと思われ、この世での再起に関係付けられるものではない。この
方向性は『増鏡』ではほとんど視界外にあるはずの順徳院の配流生
活との対比で明確化される。

佐渡院（順徳）、明くれ御行なひをのみし給つゝ、なを、さり
ともとおぼさる。隠岐には、浦よりをちのはるぐと霞みわた

〔363〕

れる空をながめ入て、過ぎにしかた、かきつくし思ほし出づるに、行方なき御涙のみぞとゞまらぬ。

うらやましながき日影の春にあひて潮波むあまも袖やほすらん
 (第二「新島守」二七九頁)

「行なひ」にかける順徳院は「さりとも」と意欲を失わないのに対して、ひたすら涙にくれて詠歌する後鳥羽院の諦念が描かれている。これらの和歌関係記事からは再起の断念に繋がる印象は与えられないだろうか。このような後鳥羽院の姿から将来の京都奪回は予想し難い。隠岐の後鳥羽院の文化的営為は和歌と信仰に集約されると言われる中で、和歌のみを極度に強調するところに『増鏡』の姿勢は明らかである。

一方、隠岐で歌を詠まない後醍醐帝は失意の中にも「後夜の行なひ」を欠かさず(四七五頁)、「密教の秘法」をも試みる(四七八頁)。「うちたへ御精進にて、朝夕つとめ行なはせ給」(四七三頁)ともある。ここに再起を志す意欲が潜在するのではないだろうか。なお、配流以前のものとして中宮禧子懐妊に際して「大法・秘法・祭り・祓ゑ、数をつくしてのゝしる」様子が詳述される部分がある。『太平記』に関東調伏のための秘法を行うための擬妊であったとされる著名な事件であるが、『増鏡』では倒幕の意欲と関係付けられるような記述は一切ない。むしろ、前坊(邦良)御息所中院通重女や「昔の弘徽殿の女御」の凶例と比較しているところからは、懐妊を擬装したとは見なされていないようである。また、この記事は西園寺家の外戚政策の一環として倒幕運動とは無関係に捉えられる可能性もある。よって、後醍醐帝の倒幕に関する勤行・修法は主に隠

岐で行われるという『増鏡』の叙述姿勢は認められてよいであろう。以上のように、和歌に託して悲哀を訴えるに終始する後鳥羽院と、「行なひ」の持続に象徴されるように再起の意欲を保ち続ける後醍醐帝との差異は将来の明暗を決定し、すべて隠岐において顕在化するのである。後醍醐帝の意志力はすでに隠岐への道行で「たいらかにだにあらば、をのづから御本意とぐるやうもありなん」(四六四頁)と明言されていた。それが結実するのが隠岐であったとも言える。

また、「行なひ」は再起の意欲を証明するだけではなく、再起を保証する機能をも持っている。

隠岐の小島には、月日ふるまゝに、いと忍びがたう思さるゝ事のみぞ数そひける。いかばかりのおこたりにて、かゝる憂目を見るらんと、前の世のみつらく思し知らるゝにも、いかでその罪をも報ひてんとおぼして、うちたへ御精進にて、朝夕つとめ行なはせ給。法の験をも心みがてらと、かつは思すなるべし。身づから護摩などもたかせ給に、いと頼もしきこと、夢にもうつゝにも多くなんありける。

(第十六「久米のさら山」四七三・四七四頁)

大願成就を予測させる「頼もしき」兆しが現れたというのは、勤行によって「罪」が浄化されたことを意味するであろう。この延長に父後宇多院の霊告がもたらされる(四七八頁)。その過程で注目されるのは、『源氏物語』の影響の強さである。

源氏の大將、須磨の浦にて、父御門見奉りけん夢の心ちし給も、いとあはれに頼もしう、いよく御心づよさまさりて、かの新

発意が御迎へのやうなる釣船も、便り出で来なんやと、待たる、心ちし給に、大塔の宮よりも、あま人のたよりにつけて、きこえ給事絶えず。
 (第十七「月草の花」四七八頁)

後醍醐帝の隠岐と光源氏の須磨とが重なり合う。貴種流離譚の死と再生の論理は『源氏物語』において最も明瞭に示されると言われる。また、源氏は「行なひ」(勤行・精進)によって宿世の罪障を消すために都を離れたとも言われる。同様に後醍醐帝は再生を果たし、都に生還すべく隠岐において罪障を抹消したのである。「行なひ」が和歌に対立する意味はここにある。こうして『源氏物語』を媒介すると『増鏡』の貴種流離譚への依存がさらに明確になる。

『増鏡』では、後醍醐帝の倒幕計画は失敗が約束されていたと言える。即位の当日に起こった左大将一条内経と右大将花山院家定の行列争い(四一二頁)、大嘗会の日の綾小路宰相有時の斬殺事件(同)を初めとして不祥事・凶兆があまりにも多い治世であった。「しはぶぎやみ」の流行などによって多数の死者を出し(四四〇頁)、「近ごろ、よき人ぐ多く失せ給ふさまこそ、いと口惜しけれ」とまで嘆かれる(四三七頁)。このような後醍醐帝であれば、正中の変の失敗、元弘の苦難は必然の帰結とも理解できる。これらすべての悪運を導いた罪障を浄化するために「異郷」としての隠岐での辛苦と「行なひ」が必要だったのである。一方、後鳥羽院にあった宝剑の欠落(二五二頁)、日吉社の怒り(二七四頁)などの障害は、ついに浄化されなかった。院にとつての隠岐は再生の場としての「異郷」ではなかったからであろう。

隠岐という「異郷」において後鳥羽院は後醍醐帝の祖霊として、

再起する帝を守護したとも考えられる。しかし、『増鏡』の文脈の中では、後鳥羽院は後醍醐帝の「先例」であった。そのことは後醍醐帝の人間性を美化するには有効であろうが、同時に後醍醐帝に「先例」の超克を要請する。そのために、配流という共通の体験によって両者を一体化させることに貢献していた隠岐の存在が改めて重要になる。隠岐は二人の帝王を同化するだけでなく、異化するためにも機能する。『増鏡』世界唯一の「地方」である隠岐が「異郷」として後醍醐帝の再生を喚起するのである。再度引用しておく。
 むかしだに沈むうらみを隠岐の海に波たち返今ぞかしこき
 (第十七「月草の花」四八六頁)

注

- (1) 拙稿 「『増鏡』の世界——「皇位継承」の意義をめぐって——」(『日本文芸論叢』第二号、昭和五八年三月) 参照。
- (2) 拙稿 「『増鏡』にみられる宮廷貴族諸流の盛衰——外戚から近臣へ——」(『国語教育論叢』創刊号、平成三年九月) 参照。
- (3) 『増鏡』本文の引用は、時枝誠記・木藤才蔵校注「増鏡」(『神皇正統記・増鏡』日本古典文学大系87、昭和四〇年、岩波書店刊)により、()内に適宜説明事項を補足する。以下同じ。
- (4) 高橋富雄「日本思想史上の中央と地方」(『季刊日本思想史』第三号、昭和五二年五月)、村井章介「中世日本列島の地域空間と国家」(『思想』第七三二号、昭和六〇年六月。同著『アジアのなかの中世日本』〈校倉書房、昭和六三年刊〉に再録)など参

[361]

照。

(5) (1)に同じ。

(6) (2)に同じ。

(7) をのれうち勝つならば、二たび足柄・箱根山は越ゆべし

(二七二頁)

(8) 拙稿「『増鏡』の基調——二家系対照と明暗循環の構図——」

「『文芸研究』第一二八集、平成三年九月」参照。

(9) (2)に同じ。

(10) 尊良親王の土佐、尊澄法親王の讃岐、洞院大納言公敏の下野、

花山院大納言師賢の下総、万里小路中納言藤房の常陸、同宰相季

房の下野が流刑地として明記されている。なお、源中納言具行と

平宰相成輔は配流の途次に処刑された。

(11) 西沢正史「『増鏡』作者論のゆくえ——洞院公賢説批判を

中心に——」(『学苑』第五七七号、昭和六三年一月)など参照。

(12) 横山弥四郎著『隠岐の流人』(島根県、昭和二八年刊、昭和

三七年再刊)、井上寛司「文献からみた古代・中世の隠岐の流人」

(『隠岐流人に関する研究』平成二年度科学研究費補助金へ一般

研究B)研究成果報告書、平成三年三月刊)など参照。

(13) 拙稿「歴史物語の系譜と『増鏡』——継承性と自律性の観点

から——」(『島大國文』第二〇号、平成三年二月)参照。

(14) 深津睦夫「『増鏡』の勅撰和歌集記事をめぐる」(『皇学

館論叢』第一五巻第四号、昭和五七年八月)参照。

(15) 樋口芳麻呂著『後鳥羽院』(王朝の歌人10、集英社、昭和六

〇年刊)一八頁など参照。

(16) 目崎徳衛「隠岐における後鳥羽院」(『芸林』第三八巻第四

号、平成元年十二月)には、連歌・俳諧・国学などの分野で後鳥

羽院が深く敬慕されたことと、『増鏡』の好評価との共通性が指

摘されている。

(17) 山岸徳平・鈴木一雄編『大鏡・増鏡』(鑑賞日本古典文学第

一四巻、角川書店、昭和五一年刊)二七五頁など参照。

(18) 拙稿「『増鏡』と両統問題」(『島根大学教育学部紀要』第

二五巻、人文・社会科学編、平成三年十二月)参照。

(19) 第四「三神山」から第十五「むら時雨」までの間に、故後鳥

羽院に関する記事は「かくのみあさましき御事どもの続きぬるは、

いかにも、かの遠き浦くにて沈み果てさせ給にし、御霊どもに

や」(二九四頁)、「むかし後鳥羽院にさぶらひし下野の君」(三一

三頁)などの数箇所にすぎない。

(20) 承久には後鳥羽院を隠岐国へ遷奉り、是又、今度(後醍醐帝

配流)に比すべからず。其故は忠有て科なき関東三代將軍家

の遺跡を可被亡天氣有に依て、下を責給しかば天道のあた

へざる理に帰して、遂に仙洞の隠岐国へ移し奉る。然といへ

ども猶武家は天命を恐て御孫の後堀川天皇を御位に付奉る。

神妙の沙汰なりとぞ皆人申ける。今度は後嵯峨院の御遺勅を

破て、如、此の儀に及条、天命も計りがたし。いかゞあるべ

からんとぞおぼえし。此君御科なくして遠島に移され給ふ、

歡慮のほど図り奉りて、御警固の武士ども皆涙をながさぬは

なかりけり。(矢代和夫・加美宏校注『梅松論』新撰日本古

典文庫、現代思潮社、昭和五〇年刊、四九・五〇頁)

- (21) 小峯和明「増鏡」(大曾根章介他編「歴史・歴史物語・軍記」研究資料日本古典文学第二巻、明治書院、昭和五八年刊) 参照。
- (22) 西村亨「貴種流離譚」(同編「折口信夫事典」大修館書店、昭和六三年刊) 一六六頁。
- (23) 小山利彦「『源氏物語』受容からみた『増鏡』の執筆意図」(『源氏物語研究』創刊号、昭和四八年二月。後に改稿されて同著『源氏物語を軸とした王朝文学世界の研究』(桜楓社、昭和五七年刊)に再録)。
- (24) (22)に同じ。
- (25) 林田孝和著『異郷論 王朝びとの心象』(桜楓社、昭和六一年刊) 参照。
- (26) 黒田日出男「『中山』——中世の交通と境界地名——」(同著『境界の中世象徴の中世』東京大学出版会、昭和六一年刊) 参照。
- (27) 『三代実録』貞観九年五月廿六日条。
- (28) 日向一雅「異郷」(『国文学』第二八巻第一六号、昭和五八年二月。同著『源氏物語の王権と流離』(新典社、平成元年刊)に再録) など参照。
- (29) 後醍醐帝二八首、後鳥羽院二〇首。次に多い西園寺実氏や後嵯峨院は一〇首程度にすぎない。
- (30) 木藤才蔵「増鏡における後鳥羽院」(『和歌文学の世界 第三集』笠間書院、昭和五〇年刊。同著『中世文学試論』(明治書院、昭和五九年刊)に再録) 参照。
- (31) 目崎徳衛前掲論文(16)。
- (32) 拙稿「『増鏡』における過去と現在——「先例」の機能について——」(『島根大学教育学部紀要』第二四巻第二号、人文・社会科学編、平成二年十二月) 参照。
- (33) 『太平記』巻一。
- (34) 『栄花物語』によると「承香殿の女御」。
- (35) (2)に同じ。
- (36) 意志力の有無は、政権掌握を知らせる夢告を信じずに「この世の御望みは絶ちはてぬる心ち」して剃髪した後高倉院と、神託に従って出家を思いとどまって将来にそなえた後嵯峨院との差異に等しいのかもしれない。後高倉院の皇統は早く断絶し、後嵯峨院の末裔は繁栄を続ける。
- (37) 三谷栄一著『物語史の研究』(有精堂、昭和四二年刊)三九四〜四〇三頁など。
- (38) 阿部秋生「須磨流離の経緯」(『講座源氏物語の世界』(第三集)有斐閣、昭和五六年刊)。
- (39) (21)に同じ。
- (40) (21)に同じ。
- (41) 前掲拙稿(32)参照。